vivo

水戸芸術館音楽紙［ヴィーヴォ］Vol.277

7-8

July & August 2026



特集 02

専属楽団・カルテット AT 水戸
これまでの歩みと
弦楽四重奏へのいざない

05　0歳からのわくわくオルガン・コンサート　きらきら★オルガン
06　ちょっとお昼にクラシック　児玉麻里＆児玉桃
08　INFORMATION

©田澤純

水戸芸術館 ART TOWER MITO

専属楽団・カルテット AT 水戸
これまでの歩みと弦楽四重奏へのいざない

文：角増 柊


©田澤純

弦楽四重奏は室内楽のなかでも、西洋音楽の根幹をなす洗練された形態の一つであるとされ、数多くの作曲家が自身の最も深い思索の表現をこの編成に託してきました。本稿では、専属楽団のカルテット AT 水戸（以下、QATM）のこれまでの演奏を振り返りつつ、さまざまな弦楽四重奏曲の世界を旅するようにめぐりたいと思います。

“弦楽四重奏の父”、ハイドン

ハイドンは生涯に80曲以上の弦楽四重奏曲を残し、後の作曲家にとって「弦楽四重奏はかくあるべき」と思えるような規範を示しました。“弦楽四重奏の父”とも呼ばれる彼の作品のなかには、ユニークな愛称がついているものがいくつもあります。

たとえば、〈剃刀（かみそり）〉。この作品は、聴いても愛称の由来はわかりません。それもそのはずで、愛称と音楽の内容は一切関係がありません。ある日、ハイドンが髭を剃っていた際に切れ味の悪い剃刀に悪戦苦闘し、「誰かよく切れるイギリス製の剃刀をくれる人がいたら、書き上げたばかりの四重奏曲を差し上げるのだが」と冗談を言ったそう。これを聞いたイギリスの出版商ジョン・ブランドが、自分の使っていた剃刀を届けたため、約束通り贈られたのがこの作品だった、というわけです。

音楽と関係のある愛称ならば、〈鳥〉が挙げられるでしょう。こちらはそのまま、第1楽章の第1ヴァイオリンの旋律が、鳥のさえずりを連想させることが愛称の由来です。〈鳥〉を含む全6曲は、第2版の出版の際に「ロシア大公に献呈」と記されたことから「ロシア四重奏曲集」という愛称で親しまれており、QATMが第3回演奏会で演奏した〈冗談〉もこのなかに収められています。〈冗談〉も音楽と関係した愛称で、第4楽章がユーモアたっぷりな終わり方をするのがその由来です。

ハイドンから、モーツァルトへ

モーツァルトも、ハイドンの模範に学び、憧れ、深い尊敬を抱いた一人です。先の「ロシア四重奏曲集」は、ハイドンが弦楽四重奏曲の様式を完成させたとも言える記念碑的な作品ですが、それに追いつき追い越そうと、モーツァルトが心血を注いで書き上げたのが、弦楽四重奏曲第14〜19番の6曲です。ハイドンに捧げられたため「ハイドン・セット」と呼ばれています。出版時の献辞では、24歳も年上にあたるハイドンのことを「わが最愛の友」と呼び、この曲集を「長く困難な苦労の果実」「私の6人の子どもたち」とたとえています。さらにその最後は、（ハイドンの）「庇護と指導のもとにあらんことを」と結ばれています。出版直前の1785年には、ハイドンをウィーンの自宅に招いてこれらの作品を披露しました。ハイドンはその場で、同席したモーツァルトの父レオポルトに「神と私の名誉にかけて申し上げます。あなたのご子息は、私が知っている、あるいはその評判を知っているすべての作曲家のうちで、最も偉大です」と述べたそうです。モーツァルト親子はさぞ嬉しかったことと思います。

それから4年後の1789年。今度はプロシャ（プロイセン）国王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世からの依頼を受ける形で、弦楽四重奏曲第21〜23番（通称「プロシャ王セット」）を作曲しました。前述の「ハイドン・セット」がハイドンの影響を強く受けているのに対して、こちらの「プロシャ王セット」は、モーツァルト独自の透明感や気品を備えた、モーツァルトの室内楽作品の最終到達点などと評されることもしばしば。QATM第1回演奏会では、このなかから第21番が演奏されました。チェロをたしなんでいた国

王を意識してか、チェロが大活躍する作品です。チェロが第1ヴァイオリンと並んで表に出たり、高音域で旋律を奏でたりするなど、しばしば従来の弦楽四重奏の枠を超えた――まさに、敬愛するハイドンを超えたとも思える瞬間が垣間見える名作です。

そして、ベートーヴェン

冒頭からチェロが大活躍する弦楽四重奏曲といえば、ベートーヴェンの第7番〈ラズモフスキー 第1番〉は外せません。QATM第3回演奏会でも、皆様から好評を博しました。この愛称は、ウィーンで長く過ごしたロシアの外交官・ラズモフスキー伯爵に由来します。伯爵は、ヴァイオリニストのイグナーツ・シュパンツィヒ率いる弦楽四重奏団をお抱えとして擁していました。そして、ベートーヴェンは自分の弦楽四重奏曲を伯爵に献呈することで、シュパンツィヒ四重奏団の卓越したアンサンブルを存分に活用しました。ベートーヴェンはとくに創作後期に難解な弦楽四重奏曲を多く作曲しましたが、その演奏はシュパンツィヒ四重奏団の協力なしには実現しなかったといっても過言ではないでしょう。彼らがベートーヴェンの意図を汲み取り、才能をいかんなく発揮したおかげで、ベートーヴェンは技術的な心配をすることなく創作に集中できたのです。来る7月18日（土）に開催されるQATM第4回演奏会では、第9番〈ラズモフスキー 第3番〉が演奏されます。当時の最高水準の超絶技巧がQATMの演奏によってどう立ちあらわれるか、ぜひご注目ください。

一方で、ベートーヴェンにとって弦楽四重奏という編成は、自身のもつ信念や哲学、ひいては、ある種の宗教性――“祈り”とでも呼ぶことができましょうか――までをも映し出す鏡であったのかもしれません。なぜなら、《ミサ・ソレムニス》（作品123／1822年作曲）や〈交響曲第9番〉（作品125／1824年作曲）などの大規模な作品を完成させた後、ベートーヴェンは最晩年の数年間で集中的に取り組んだのが、他ならぬ弦楽四重奏曲であるからです。第12～16番がこの時期の創作にあたります。

とくに第14番（作品131）は、その結晶ともいえましょう。全7楽章を休みなく連続して演奏する長大作で、後の作曲家たちにも多大な影響を与えました。シューベルトは、本作の演奏を聴いて非常に興奮し、心から傾倒したと伝えられています。チャイコフスキーは、この曲の中に「埋め草（無駄な音）」が一切ないと絶賛しました。そしてワーグナーは、この曲のもつ巨大かつ緻密な構造を「ベートーヴェンの一日」になぞらえ、その精神性を読み取ろうとしました。

第15番（作品132）には、ベートーヴェン自身の生活状況や苦難とも結びついたエピソードがあります。第3楽章に「病いが治った者の神への聖なる感謝の歌」という標題が自筆で記されていますが、この作品は、ベートーヴェンが腸の重病から回復した直後の心境を音楽で表現しようとしたものだといわれています。同楽章の「新しい力を感じながら」という指示がある部分では、まさに生きる意欲が溢れるような響きを聴くことができます。いずれQATMによる演奏を聴ける日がやってくるのを、待ち遠しく思います。

ロマン派以降の作品

ロマン派の時代に入ると弦楽四重奏人気はやや下火になりますが、水戸室内管弦楽団（以下、MCO）もたびたび演奏した――1998年の第1回ヨーロッパ・ツアーでも――シューベルトの弦楽四重奏曲第14番〈死と乙女〉は、こんにちでもよく取り上げられる名曲です。もとは歌曲として作曲され、後にその旋律が本作の第2楽章に引用されたことから、この名がつけられました（ちなみにMCOは、グスタフ・マーラーによる弦楽合奏編曲版を演奏）。原歌曲は1817年、シューベルトが20歳の頃に作曲されました。ドイツの詩人マティアス・クラウディウスによる詩は、病に伏して死を恐れる若い乙女と、彼女に「おとなしく私の腕の中で眠れ」と優しく語りかけて永遠の安息へと誘う死神との対話を、痛ましく描いたものです。そして、第14番が書かれたのは1824年。この頃すでにシューベルトの身体には、当時「不治の病」といわれていた梅毒の症状があらわれはじめ、それに起因して神経も衰弱していました。全楽章が暗い短調の響きで書かれており、とくに第2楽章の沈痛な表情には、ほとんど救いがありません。一説には、自分自身の夭折を早くから予感していたのではないかとも言われています。QATM第1回演奏会では、劇団ACMの塩谷亮さんによる歌曲の詩の朗読付きで演奏されました。

シューマンやメンデルスゾーン、ブラームスといったドイツ・ロマン派の巨匠たちも、とくにベートーヴェン後期の弦楽四重奏曲から多くを学び、それぞれに個性的な優れた弦楽四重奏曲を遺しました。シューマンは3曲の弦楽四重奏曲（作品41）の作曲に先立ち、ベートーヴェン後期の弦楽四重奏曲を深く研究したそうです。メンデルスゾーンはバッハへの傾倒ぶりがよく知られていますが、ベートーヴェンの訃報に接し、ベートーヴェンのピアノ・ソナタや後期弦楽四重奏曲から大きな影響を受けるようになりまし


前回の公演より　©田澤純

た。そして、ブラームスが40歳になるまで弦楽四重奏曲を発表しなかったのは、ベートーヴェンの偉大な遺産に対する畏敬の念と自身の慎重な性格が理由であり、発表までに20曲以上もの試作を破棄したと伝えられています。このあたりの作品も、ゆくゆくはQATMの演奏会でも取り上げられることと思います。

後期ロマン派から近代にかけての作品では、ドヴォルザークの弦楽四重奏曲第12番〈アメリカ〉が有名でしょう。QATMも第2回演奏会で披露しました。ドヴォルザークはニューヨークのナショナル音楽院院長としてアメリカに滞在していた最中に、祖国チェコに対するホームシックを癒すため、1893年の夏にチェコ人移民が多く住むアイオワ州のスピルヴィルで休暇を過ごしました。母国語が通じ、故郷に似た風景が広がるこのリラックスした環境の中で、わずか数日のうちに本作を書き上げたそうです。ドヴォルザークがアメリカで耳にした黒人霊歌や地元の音楽の影響が表れている一方で、どこかボヘミアの空気も感じられるのがおもしろい作品です。ドヴォルザーク自身が、学校卒業後にダンスホールの楽団や歌劇場のオーケストラでヴィオラ奏者として長く働いていた経験からか、曲の随所でヴィオラの活躍が目立つのも特徴的です。

ドビュッシーやラヴェルなど、フランス人作曲家も弦楽四重奏曲に取り組みました。ドビュッシーが遺した唯一の弦楽四重奏曲は1892～93年（彼が30～31歳の頃）に作曲されました。期せずしてドヴォルザークの〈アメリカ〉と同年の作品です。これまでの伝統的な枠組みを保ちつつも、ドビュッシー独自の色彩感やリズムが散りばめられた革新的な傑作として知られており、1894年にブリュッセルの画廊で行われた演奏会で本作を鑑賞した批評家のモーリス・クッフェラートは、1889年のパリ万国博覧会での「カイロ街の東洋趣味」や「ガムランの響き」を連想させると評しました。ドビュッシーが独自の様式へと踏み出す重要な転換点となった作品です。

そして、ドビュッシーの紡ぎ出す音響や色彩に深く影響を受けた邦人作曲家といえば、今年没後30年を迎える武満徹です。折りに触れて、「私は、ドビュッシーの類稀な直覚に導かれて、音の光と影、音の密度と濃淡というものを認識」していると語っていたり、「音の多面性（両義性）を、知的に（明晰な意識で）輪郭づけた、ドビュッシーは、最初の作曲家」であったと述べていたりすることからも、武満のドビュッシーに対する特別な愛着がうかがえます。今度のQATM第4回演奏会では、ドビュッシーの弦楽四重奏曲とともに武満の〈ア・ウェイ・ア・ローン〉も演奏予定です。両者を並べて鑑賞することで、新しい発見や気づきを得られること間違いなしです。

＊＊＊

オーケストラの大規模な響きやオペラの劇的な表現とはひと味違って、弦楽四重奏は表現の「凝縮性」や「機動性」が特徴的であり、とりわけ、深い内面性の表現において比類のない真価を発揮します。少数の弦楽器による重奏であるため、極めて微細な音の対照や表現が可能であり、この点がいつの時代も作曲家や演奏家、そして聴き手の魂を揺さぶるのでしょう。皆様にもぜひ、QATMとともに弦楽四重奏の幅広い世界をめぐっていただけましたら幸いです。ご来場を心よりお待ちしております。

■公演情報

水戸芸術館・専属楽団
カルテット AT 水戸
第4回演奏会

2026.7.18（土）
13:30開場 14:00開演
全席指定 一般￥4,500
U-25（25歳以下）￥1,500

●出演
川崎洋介、西野ゆか（以上ヴァイオリン）、
柳瀬省太（ヴィオラ）、辻本玲（チェロ）

●曲目
ドビュッシー：弦楽四重奏曲 ト短調
武満 徹：ア・ウェイ・ア・ローン
ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第9番 ハ長調
作品59の3〈ラズモフスキー 第3番〉

オルガンとトランペットのステキな関係

文：角増 柊


浅井美紀


若林万里子

その昔、現在のドイツ北部ニーダーザクセン州のあたりに、オルデンブルク家が治める地がありました。オルデンブルク家は代々、デンマーク王兼ノルウェー王の座にあった家系です。この地の宮廷には、多くの音楽家たちが勤めていました。なかでも、オルガン奏者とトランペット奏者には「第三の高位」という称号が与えられていて、彼らは音楽家たちのなかでも特別な存在でした。オルデンブルク家での“特別待遇”からも推察できるとおり、この時代において、トランペットは王様や貴族たちから特権を授けられた選ばれし楽器であり、オルガンは神様から祝福を受けて天上の音楽を奏でる万能な楽器として、それぞれ尊敬を集めていました。どちらも単なる楽器としてではなく、神様や王様の権威を示すための特別な道具、いわば祭具に近い役割も担っており、国王の戴冠式、司教の叙階式、領主の結婚式など、国や教会の重要な式典で大いに活躍しました。

歴史的な話以外からも、トランペットとオルガンは“なかよし”な楽器だといえましょう。オルガンはトランペットと同じ吹奏楽器（管楽器）の仲間に分類できます。オルガンはふいごや電動送風機などの送風装置を使って、トランペットは人間の息を使って、それぞれ管（パイプ）の中に勢いよく空気を吹き込むことで音を生み出すからです。さらには、ずばり「トランペット」という音色が備わったオルガンもあります。金属のリードを風で振動させ、その音を共鳴管で増幅させることで、トランペットに似たきらきらとした力強い音が出ます。ちなみに、オルガンといえば垂直にそびえ立つ無数のパイプを想像しますが、スペインで造られたオルガンなどには、トランペットの音色を出すパイプが水平に突き出ており、迫力のある音を出せるものもあります。

そして、この“なかよし”な2つの楽器の音を気軽に楽しめるのが、来る8月9日（日）に開催される「0歳からのわくわくオルガン・コンサート きらきら★オルガン」です。クラシックの名曲はもちろん、どこかで聴いたことのある楽しい曲も交えた小さなお子さまでも楽しめる曲目や、手遊びで一緒に参加するコーナー、音楽に合わせて体を動かせるコーナーも予定しています。出演は、本シリーズのほか、水戸市内の保育施設を対象とした「幼児のためのオルガン見学会」でも大人気のオルガニスト・浅井美紀さん、そして、水戸室内管弦楽団にもゲスト奏者として多数出演しているトランペッター・若林万里子さんです。夏休みのひととき、家族みんなで音楽を楽しんでみませんか。

■公演情報

0歳からの
わくわくオルガン・コンサート
きらきら★オルガン

2026.8.9（日）
10:30開場 11:00開演
※45分公演（休憩なし）
全席指定　こども（0歳～小学生）¥500、一般（中学生以上）¥1,000

●出演
浅井美紀（オルガン）
若林万里子（トランペット）

●曲目
手のひらを太陽に（いずみたく）
トランペット吹きの休日（アンダーソン）ほか

水戸芸術館3部門合同企画
〈こども芸術館〉サマー・フェス2026
開催のお知らせ

こども芸術館

音楽、演劇、美術の3部門がクロスオーバーする、水戸芸術館ならではの夏休み子ども企画を新しく実施します。現代美術作家や専属劇団員によるワークショップ、初めてのコンサート体験など、多種多様なプログラムを通して、わくわくするアート体験を子どもたちに提供します。上記オルガン公演も本企画の一環として開催します。夏休みの一日をどうぞご家族でお楽しみください。

■公演概要

〈こども芸術館〉
サマー・フェス2026

2026.8.8（土）、9日（日）
参加方法、料金、内容等の詳細は公式サイトをご覧ください。

水戸芸術館でのデュオ公演に寄せて

児玉麻里・児玉 桃

普段はソロで演奏する私達ピアニストにとって、他の演奏家と共演できる瞬間は、まさに特別なものです。室内楽やオーケストラとの共演もそうですが、ピアニスト同士の共演は、同じ音色を共有できるため、格別な喜びを与えてくれます。だからこそ、二人の演奏家が、呼吸、感性、そして美的感覚において、より一層の共鳴が求められるのです。

相性が抜群に良い場合、2台のピアノの演奏は、驚くほど力強い世界を開きます。

フルオーケストラの迫力を持ちながら、たった二人の演奏家ならではの柔軟性を兼ね備えているのです。姉妹である私たちは、幼い頃からずっと一緒に演奏してきました。デュオとしてプログラムを作り上げ、聴衆の皆様と分かち合うことは、いつも大きな喜びです。

姉である麻里にとって、水戸は今回が初めての訪問です。もちろん、歴史的な場所として水戸のことは知っていますし、名高いコンサートホールで演奏できることを心待ちにしています。

妹の桃にとって、水戸は特別な場所であり、数々の重要なプロジェクトが実現した場所です。ドビュッシーをテーマにしたコンサート・シリーズ、水戸室内管弦楽団とのヨーロッパ演奏旅行を含む共演、小澤征爾氏とのレコーディングなど、数々の思い出深いプロジェクトがここで行われました。水戸には素晴らしい思い出がたくさんあり、今回初めてピアノ・デュオとして水戸を訪れることで、さらに素晴らしい思い出が加わる事を楽しみにしています。

取材協力：株式会社ヒラサ・オフィス



© Lyodoh Kaneko

千紫万紅のピアノ・デュオ
～バレエ音楽の名作群を聴く～

文：中村 晃


児玉麻里 © Lyodoh Kaneko


児玉 桃 © Lyodoh Kaneko

オーケストラにも匹敵する多彩で濃密な音楽を実現してしまうピアノ・デュオの演奏。今から20年以上前に、野平一郎さんは、水戸芸術館での永野英樹さんとのピアノ・デュオ公演ご出演の際に、「2人のピアニストが完全に息のあった演奏を行うことは、他人同士ではほとんど難しく、兄弟や姉妹などの血縁関係のある人同士でないとその実現は難しいのではないだろうか。他人同士で演奏する場合は、演奏者も割り切ってそのズレを楽しむしかないのではないか」といった内容のお話しをされていました。

今回の公演では、ヨーロッパを拠点に国際舞台で活躍するピアニストの姉妹、児玉麻里さんと児玉桃さんが出演します。この2人だからこそ実現できる、ピアノ・デュオの完璧なまでにシンクロしたダイナミックな演奏に、どうぞご期待ください！

児玉麻里さんは、14歳の時に最年少、最優秀でパリ国立高等音楽院に入学。同音楽院を修了後すぐにロンドン・フィルハーモニー管弦楽団とバービカン・センターで共演。以来、ヨーロッパ、アメリカ、日本、アジアで演奏活動を展開して名声を博している名ピアニストです。一方の児玉桃さんは、前頁のメッセージにあるように、小澤征爾・水戸芸術館前館長から絶大な信頼を得て、当館の様々な公演にご出演いただいています。また、昨年に開催された第19回ショパン国際ピアノ・コンクールでは審査員も務めて、大きな話題となりました。

2人が水戸公演のために選んだプログラムは、色彩豊かでエネルギッシュなバレエ音楽の名作群です。まずは、チャイコフスキーの〈白鳥の湖〉と〈くるみ割り人形〉の2作品からの抜粋。チャイコフスキーは、この2作と〈眠れる森の美女〉を加えた3大バレエ作品によって、女性の舞踊手の魅力を引き立たせるための伴奏音楽の域を出なかった当時のロシアのバレエ音楽を、芸術的な高みへと引き上げました。今回の演奏会では、若き日のドビュッシーが1880年に4手ピアノのために編曲した〈白鳥の湖〉の3つの踊りとラフマニノフやスクリャービンらの師であるロシアの作曲家アレンスキーが1892年に2台ピアノのために編曲した〈くるみ割り人形〉からの2曲が取り上げられます。

そして、今回の演奏会のメインとなるのが、ストラヴィンスキーの〈春の祭典〉です。ディアギレフの主宰するロシア・バレエ団のために作曲され、1913年5月29日、パリのシャンゼリゼ劇場で初演されました。この音楽があまりに斬新であったために、その初演は大きなスキャンダルとなりました。オーケストラの序奏の間にさえ、客席からは嘲笑や不満の声が起こり、バレエの幕が上がると、その音楽と同様にニジンスキーの振り付けも観客を憤慨させ、抗議とそれに対する抗議の声が劇場内に響き渡り、踊り手たちは自分たちの踊りを合わせる音楽が聞こえなくなるほどであったそうです。しかし、現在ではこの作品は20世紀を代表する管弦楽曲として、音楽史の1ページを輝かしく飾っています。〈春の祭典〉の最大の革新性は、リズム法の拡大です。西洋芸術音楽では、3拍子、4拍子というような規則的な拍節に従って創作が行われてきました。そのリズム法にまったく新しい光を投げかけたのが、〈春の祭典〉でした。そして、ストラヴィンスキーは4手ピアノ版も自ら手掛けており、今回はその版が2台ピアノのスタイルで演奏されます。

オーケストラにも匹敵する千紫万紅のピアノ・デュオ、しかもこの上なく息の合った演奏を、「ちょっとお昼」のひと時に、どうぞお楽しみください！

■公演情報

ちょっとお昼にクラシック
児玉麻里＆児玉桃
～千紫万紅 ピアノ・デュオ～

2026.7.2（木）
13:00開場 13:30開演
（終演予定14:30頃）
全席指定 ¥1,500
（カップオン サザスペシャルブレンド1枚付き）

●出演
児玉麻里、児玉桃（ピアノ）

●曲目
チャイコフスキー（ドビュッシー編曲）：
バレエ音楽〈白鳥の湖〉作品66より
チャイコフスキー（アレンスキー編曲）：
バレエ音楽〈くるみ割り人形〉作品71より
ストラヴィンスキー：バレエ音楽〈春の祭典〉より

INFORMATION

※以下は6月1日現在の情報です。公演等に関する最新情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

チケット・インフォメーション

《7.25(土)発売予定》

■内田光子 ピアノ・リサイタル
11.8(日)

■レ・ヴァン・フランセ
11.20(金)19:00

■田中宏明 ピアノ・リサイタル
11.23(月・祝)15:00

■茨城の名手・名歌手たち 第34回演奏会
11.29(日)16:00

《8.29(土)発売予定》

■豊嶋泰嗣(ヴァイオリン)&クンウー・パイク(ピアノ)
12.15(火)19:00

■クリスマス・プレゼント・コンサート2026
12.19(土)16:00

■第3回 茨城キリスト教学園中学校高等学校コーラス部 演奏会
12.25(金)15:00

■庄司紗矢香(ヴァイオリン)&鈴木優人(チェンバロ)
1.24(日)

好評放送中!

Lucky FM 茨城放送
「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」
毎週日曜 7:30〜8:00
パーソナリティ:石井哲也アナウンサー
出演:音楽部門学芸員(月替わり)
学芸員がおすすめの曲をご紹介して、クラシックの魅力をお届けする番組です。



▶Lucky FM ウェブサイト https://lucky-ibaraki.com/
▶radiko(ラジコ)でもお聴きいただけます https://radiko.jp/

7月・8月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

◆ちょっとお昼にクラシック 児玉麻里&児玉桃(ピアノ・デュオ)
7.2(木)13:30
料金[全席指定]¥1,500(カップオン サザスペシャルブレンド1枚付き)

◆あひる会合唱団 第59回 定期演奏会
7.12(日)14:00
料金[全席自由]一般¥1,500/高校生以下¥700

◆カルテット AT 水戸 第4回演奏会
7.18(土)14:00
料金[全席指定]一般¥4,500/U-25(25歳以下)¥1,500

◆0歳からのわくわくオルガン・コンサート きらきら★オルガン
8.9(日)11:00
料金[全席指定]こども(0歳〜小学生)¥500/一般(中学生以上)¥1,000

エントランスホール

◆パイプオルガン・プロムナード・コンサート(入場無料/事前予約不要)
□7.4(土)11:00〜11:30/12:30〜13:00 山司恵莉子
□7.20(月・祝)12:00〜12:30/13:30〜14:00 佐藤謹然
□8.1(土)13:30〜14:15 山田由希子 ★び〜すプロジェクト
□8.29(土)12:00〜12:30/13:30〜14:00 尾畑瑞香

◆プロムナード・コンサートEXTRA
8.15(土)12:00〜12:30/13:30〜14:00 富岡沙友里(ソプラノ)

◆時報オルガン(入場無料)
8.8(土)11:00、12:00、13:00、14:00、15:00、16:00
〈子ども芸術館〉サマー・フェス2026(p.5参照)に合わせて開催。毎時00分に大オルガンが時報のように鳴り響きます。

演劇・美術のイチオシ企画!

ACM劇場

◆谷川俊太郎の「ことば」と「おと」
『いつだって今だもんーきのうとあしたのラブストーリーー』
7.25(土)〜29(水)11:00/15:00
[脚本]谷川俊太郎 [演出・脚色]橋本昭博
[音楽]谷川賢作
[出演]團 悠哉、安倍康律、大内真智、瑞生桜子、七味まゆ味、母里幸知子、星本 悠、加藤結凪
[演奏]谷川賢作、堀江洋賀(gt.)、坂本貴啓(drums&acc.)
料金:大人¥3,200/こども(18才以下)¥1,000
※お得な親子チケットもあります。詳しくは当館Webサイト(ACM劇場)をご確認ください。



現代美術ギャラリー

◆竹村 京 うごくせかい
7.25(土)〜10.12(月・祝)
[休館日]月曜日(ただし、9.21、10.12は開館)
[開場時間]10:00〜18:00(入場は17:30まで)
[入場料]一般¥900/団体(20名以上)¥700 ※高校生以下/70歳以上、障害者手帳などをお持ちの方と付き添いの方1名は無料


竹村 京《入ってもよろしいですか シーン1, 2, 3, 4, 5》2023年(参考図版)

★《第九》コーラス参加者募集!
水戸芸術館では「水戸の街に響け!300人の《第九》」コーラス参加者を募集いたします。詳しくはウェブサイトから応募要項をご覧ください。【お問合せ】水戸芸術館音楽部門《第九》係

2026年6月9日発行(第277号)
編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村 晃、関根哲也、篠田大基、角増 柊、根本彩生、高木春佳、渡辺有美
発行:(公財)水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)
Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30〜18:00・月曜休館) https://www.arttowermito.or.jp/
デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社

■編集後記

午後から豪雨に見舞われたある休日。インドア派らしく家で過ごしていたら、ベランダに小鳥が1羽、雨宿りをしに飛び込んできた。それはそれは立派なモヒカンヘアーだった。心のなかで勝手に名前をつけた瞬間、飛んでいってしまった。ごめん、ベッカム。(角)

2013年から続く「準・メルクル弦楽器貸与プロジェクト」。これまで受け継がれてきた楽器が、この春、新たな貸与者8名の手に託されました。どのような響きや表現が生まれていくのか——その先に広がる歩みと成長の過程を楽しみにしております。(根)

今年の夏休みは沖縄!!! 何回か沖縄には行ってるのですが、今回は4年ぶりです! 30代らしく、ゆったりまったりな沖縄旅行を楽しんできます。透明度の高い海は泳ぐのではなく、眺めるもの(笑)。天気良いといいなあ。(春)

Chat GPTのすばらしさに感動しています。と、同時に、日本語って難しいなあとも感じます。私の質問次第で回答が変わるので、そうか、そういう風にも捉えられるか…と勉強になります。ただ、頼りすぎは良くないと思うので、適度な距離を保ちたいです。(辺)

9月12日の「ちょっとお昼にクラシック」にご出演いただく塚谷水無子さんに、先日、会場下見をしていただきました。たくさんの鍵盤楽器を舞台に並べ、響きを確かめつつ、あれこれ選曲。そのときの写真はチラシにも載せました。それにしても、トイピアノの音が、あんなに通るとは!(篠)

イギリスの名ソプラノ、フェリシティ・ロットが亡くなった。3.11から一月余という、なおも緊迫した時期に東京で開催されたリサイタルは忘れられない。アンコールは、今日より明日が幸せになるよう祈りをこめたR.シュトラウスの「明日」。R.I.P.(て)